

## 近世画譜にみる寒山拾得

江崎ゆかり（学習院大学）

禅の好画題として数多く描かれた寒山拾得図は、日本においては鎌倉時代以降、中国画を規範として描き継がれ、様々なヴァリエーションの図様が生み出された。経巻を持った寒山と箒を持った拾得の姿を描いたもの、岩壁に詩を書き付ける寒山と岩で墨を磨る拾得、また、寒山拾得と同じく国清寺に住んでいたとされる僧・豊干と彼の連れていた虎、そして寒山拾得が共に眠る姿を描いた「四睡図」などが定型の図様として知られる。近世においても、その形象は広く知られており、絵画教本や複製画集として制作された画譜類に多くの図様をみることができる。本発表は、近世画譜にみられる寒山拾得の図様の分析を糸口として、テキストとイメージの結びつきの有り様を示すことで、近世における画題理解の一端を明らかにすることを目的とする。

例えば、林守篤が編集した『画筌』（1712年自序）巻4には、両手で経巻を開き左方に視線を向ける蓬髪の「寒山」、箒を持つ半身像の「拾得」、松樹の下で眠る「四睡」の3図が載せられるが、いずれもそれまでに蓄積された定型図様の枠から逸脱する図様ではない。しかし、その一方で、鈴木鄰松『一蝶画譜』（1770年刊）には、「めをさます圖」と題された「四睡図」や、木にもたれて眠りこける拾得とその顔に筆を突きつける寒山を描いた「寒山拾得」のような戯画的なものがあり、長谷川等雲画『繪本宝鑑』（1688年刊）巻3の「勅使寒山」や大岡春卜『画巧潜覧』（1740年刊）巻4の寒山拾得図のように寒山拾得にまつわるテキストの記述を基にした新たな図像を見ることができる。

寒山拾得関係のテキストとしては、まず寒山が木や壁に書き記したとされる詩をまとめた『寒山詩集』と閻丘胤という人物が著したとされる『寒山詩集』の序文（以下、「序」）がある。閻丘胤の「序」には寒山拾得の国清寺における奇行などが語られ、寒山の身なりについても、樺の木の皮を冠とし、破れた衣をまとい、足には下駄を引きずっていたというように具体的な形象が示されている。また、「序」の筆者である閻丘胤が豊干、寒山、拾得と出会い、交流したとの逸話を載せる。『繪本宝鑑』や『画巧潜覧』にみられる閻丘胤（勅使）と寒山拾得との交渉の場面は、この閻丘胤の逸話を基にしていると考えられる。

同様の趣向で制作された絵画作品に与謝蕪村筆「寒山拾得・閻大使図」（個人蔵）があり、その他にも『五灯会元』など禅僧たちの伝記や問答を収録した燈史類の記述を基にした伊藤若冲筆・無染浄善賛の「厩児戯箒図」（鹿苑寺蔵）などがある。これらに共通するのは、寒山拾得図のイメージソースであるテキストへと立ち戻り、そこに表された寒山拾得のイメージを改めて取り入れようという意識であり、その背景には、江戸時代中期における禅宗文化の興隆に加え、一種の画題辞典ともいえる画譜類の出版があったと考えられる。